

Kamalaśīla と Haribhadra

——一切智者の智の証明を巡って——

森 山 清 徹

ここで以下の二点を検証する。〔Ⅰ〕Kamalaśīla (K) と Haribhadra (H) の一切智者の智 (sarvajñajñāna) の論証方法とその内容、及び Bhāvaviveka (B) との見解の相違点。〔Ⅱ〕一切智者の智の論述内容に関して、H の *Abhisamayālaṃkāraloka Prajñāpāramitāvyākhyā* [AAPV]¹⁾ と K の *Tattvasaṃgrahaṇī* [TSP]²⁾ の各部分が、全体に亘って逐字的に一致する。瑜伽行中観派 (Yogācāra-Mādhyamika) の思想史上、このことの有する意味。

〔A〕 瑜伽行中観派の論師として、Jñānagarbha (J), Śāntarakṣita (Ś), K, H をして代表させるならば、彼ら四人に共通した立場、すなわち、ある論題に対する対応の仕方、さらにその見解に一致するものを具体的に提示する必要がある。その論題の一つに因果関係の成立の是非を巡る問題があり、その検証方法として、例えば、K の *Madhyamakaloka* (Mal)³⁾ では、因果関係は、pratyakṣa によって、勝義的には証明されないとしながらも、もし成立するならば、それは indriya-pratyakṣa か、svasaṃvedanapratyakṣa によって証明されることになろうと二分し⁴⁾、まず、最初に indriyapratyakṣa による吟味として、顕現 (ābhāsa) を有した知が、知と別な対象を把握することは不合理であり、また無顕現の知によっても⁵⁾、さらに〔対象と〕別な形象を有する (gzan gyi rnam pa can) 知によっても対象は把握されない⁶⁾、ことを指摘し、因果関係の勝義的に成立し得ないことを証明する⁷⁾。この A) 顕現を有する知として有形象知 (sākārajñāna) を B) 顕現を持たない知として無形象知 (nirākārajñāna) を、そして C) 対象とは別な形象を有する (gzan gyi rnam pa can) 知、の三種の知のあり方の吟味を通じ、論題を検討して行く方法は、J, Ś の場合も⁸⁾、K と共通する。K の場合は、Mal の他に TS, 1998 偈の解説⁹⁾ や *Ārya-prajñāpāramitā-vajracchedikāṭika* (PVT)¹⁰⁾ で、外界の対象が成立し得ないことを論じる際、直接知覚 (pratyakṣa) による吟味として、上記の三種の知による検証をなす。この検証方法が、実は、K と H が、一切智者の智 (sarvajñajñāna) の整合性を証明する際にも採用され、そして、彼らは、一切智者の智は、それら三種の知、各々の有する矛盾点を克服していることを論

証する。換言すれば、その智は、三種の知の何れにも該当せず、その枠組みを超えている。いま、その論述内容を見、KとHの考える一切智者の智の特性を把握する。なお、その資料として、前述の如く、KのTSP最終章での、ŚのTS. 3626偈に対する解説部分¹¹⁾が、HのAAPVのもの¹²⁾と逐一同定される故、同時に両者に共通した見解を看取し得る。ここでは、Hのものを底本とする。まず、瞬間的な単一な知(ekajñānakṣaṇa)の有限、無限を巡る問題が討論される。一切智者の智は、全てを捉えるという点では、限定性(antavat)はなく、無限である。しかし、識別能力を具えている点では、知に顕現した事物を特定化する能力がなくてはならない。この一見、相対立する事柄が、無形象知を論点として、検討される。すなわち、同時に、瞬間的な単一な知によって(yugapad ekajñānakṣaṇena)識別される限り、その知は、有限となるのではないか¹³⁾、との対論者の詰問に対し、次のように答論される。瞬間的である単一な知によって、同時に、諸事物は多様なものとして確認される。諸事物の無限性は損なわれない¹⁴⁾。無限定な(ananta)事物を限定性(antavattva)によって捉える人が、迷乱している。存在しているものを存在性(astitva)によって、存在していないものを非存在性(nāstitva)によって把握している人が、一切智者(sarvavid)といわれる¹⁵⁾。

〔1-a〕さらに対論者は、無形象知(nirākārajñāna)の有する欠陥を指摘し、一切智者の智も、その欠陥を有すると詰問している。その欠陥とは、無形象知は、特徴付けられること(viśiṣṭatva)がない故、対象を把握し得ないし、各々の事象に対する区別もあり得なくなる¹⁶⁾。というものである。これに対し、答論は、一切智者の智は、全ての事物を対象としている故、各々の事象の区別は認められない。その智は、青や黄の知覚というものではない。だからかえって、あらゆるものが認められる。凡夫にとって、知は、それぞれ一定したものを対象として把握する。その凡夫には、無形象知の理論では(nirākārajñānapakṣe)、あらゆる場合に、個別性が存在しないから(aviśeṣāt)各々の事柄に区別があり得なくなってしまう欠陥がある。〔凡夫の無形象知には〕、これは青の知覚であり、黄色の知覚ではないという確定が存在しないからである。あらゆる凡夫には、全てを知ること(sarvajñatva)について難点が付随する。一方、一切智者には、全てを知ることが認められる。従って、一切智者の状態にあって、ヨーガによって起こされている無形象(nirākāra)知は、何らの矛盾もない¹⁷⁾。しかしながら、一切智者は、全てを知り得るとしても、どうして、それらを混同することなく区別(vibhaga)し、識別し得るのか、このことが問われなければならない¹⁸⁾。この疑念に関しては、

次のように答論される。

〔1－b〕 一切智者の智には、事物の顕現することに有限さはなく、無限である。かつ、捨てさらわれるべきものと、取得すべきもの (heyopādeyavastu) [の区別] が顕現し得る。なぜなら、後に一切智者の智によって起こされた清浄にして世間に関する深遠な瞑想による知 (pāścātsarvajñajñānabalotpannaśuddhalaulikapratyavamarśapratyaya) により識別されるからである¹⁹⁾。この全ての事物を顕現する知の無限定性と取捨選択の識別をなす知の顕現を区別し得る能力とは、一切智者の智には矛盾なく具わっている。その識別し得る能力を、一切智者の後得清浄世間知とする。従って、凡夫の無形象知には、識別能力を欠くという欠陥が付随するが、一切智者のヨーガによって起こっている無形象知には、同時に、後得清浄世間知が具わっているから、無形象知一般の有する欠陥は克服されるのである。

〔2〕 一方、有形象知 (sākārajñāna) に焦点をあて、一切智者の智が検証されている。有形象知の考察においては、単一の (eka) 知と形象の複数 (aneka) であることの不一致及び形象の真偽 (satya, alika) が、常に問題とされるが²⁰⁾、この場合も、同様な発問がなされ答論が展開している。まず、単一の知が、複数なる事物の形象を把握することに矛盾のないこと。その単一、複数という不一致は、単一の知に勝義の (paramārthika) 形象が、存在するなら、単一の知に複数の形象が帯び、矛盾するが、諸の形象は真実ならざるもの (asadbhūtatva) であるから、問題とならない。その限り、形象は非真実 (asatyabhūta) である²¹⁾。そこで反論者は、それでは知は迷乱している (bhrāntajñāna) ことになり、一切智者は迷乱していると追及する。これに対し、ありのままに熟知されるから (yathābhūtaparijñānāt) 誤謬はない。なぜなら、真実ならざるものが、真実として把握されるなら、そのとき、迷乱は存在しようが、他方、非真実なる諸の形象を、まさしく非真実なものとして知る場合、迷乱は存在しないと答弁する²²⁾。これらの論議から知られることは、一切智者の智は、一時に複数なる形象を把握し得るし、かつ形象は真ではないということである。このことも、一切智者の有形象知に関してのみ、言い得る。なぜなら、有形象知一般は、無形象知一般の場合と同様、J, Ś, K, H の共通して論破するところである²³⁾。

〔3〕 第三の、対象とは別な知に投入された形象を把握する (arthavyatiriktañāna-
nārūḍhākāragrahaṇa) 場合、その人は、迷乱しているとの詰問に対し、簡潔に答論されている。この「対象とは別な形象を有する知」が想定されているが、これは、通常の正しい認識の仕方ではなく、逸脱している。したがって、その場合は、迷

乱が存在しようが、通常の正しい、対象のあり方の区別を伴った認識の機能によって、その対象を認識している人に、迷乱は存在しない。有形象知識論者の理論(sākārajñānavāḍipakṣa)では、知には、それ自らの形象(ātmākāra)を知覚することとは別に、他の対象を認識する機能はない。とこの第三の知の形式自体が成立し得ないことを指摘する²⁴⁾。従って〔1〕〔2〕より結論として知られることは、同時に、瞬間的な単一な知によって、無限な事物の形象が把握され得るから、無限な事物が単一な知によって遍充される(vyāpta)²⁵⁾。よって、一切智者の智は、無限に事物を知り得る能力と、後得清浄世間智による、それらの事物を混同なく識別し得る能力を同時に具えるものである。これらは、基本的には瑜伽行唯識学派の見解²⁶⁾に沿っている。他方、同じ中観派にあっても B. とは異なる。B. は経量部的見解²⁷⁾に立ち、一切智者といえども、一時に、多なる形象を把握することは出来ず、第二刹那に及ぶ²⁸⁾、との点は、K. や H. の瑜伽行中観派と B. をはじめとする経量中観との見解の相違を示している。

〔4〕さらに H. は、ヨーギンの無漏知(anāsravajñāna)について論を展開している²⁹⁾。それによれば、一般相(sāmānyalakṣaṇa)を把握した修習によって明瞭な顕現(sphuṭapratibhāsa)の起こっているヨーギンの知は、独自相(svalakṣaṇa)を対象としている。また同時に、単一な知によって、対立した複数の対象を把握することが経験されること(viruddhānekārthagrahaṇopālambha)。世尊は、証因(liṅga)が存在しない故、過去と未来を推理によって知るのでなく、現在の直接知覚(pratyakṣatva)によって、過去と未来を直観すること、が述べられている。

〔B〕前述の如く、一切智者の智の整合性の証明をなす H. の AAPV の部分、〔1〕～〔3〕に示した如きものが、K の TSP に比定される。このことは、両者の思想上の一致を示すと共に、K. が瑜伽行中観派の論師としての系列上、思想的に先立つことを示す確かな根拠を与えるものである。その逆、つまり、H. が K. に先行するとは考え難い。その理由は、K. と H. との(J, Ś も含めての)文献上、思想上の一致については、別稿ですでに指摘したところであるが、例えば、一切法無自性を論証する際に、原子論、形象真実論、形象虚偽論を順に論破する方法と内容の一致³⁰⁾、また、四種の因果論を検討論破すること³¹⁾、さらに諸哲学の観察と超越を図る修道論³²⁾である。一切智者の智の論証は、K の TSP では、TS. の注釈として、その第 26 章に現われ、K にとってその詳述の必然性は、H が、『八千頌般若経』³³⁾を解説する際に展開する場合に比べ、遥かに高いと思われる。従って、逆に H. の AAPV における論述が、K. に影響を与え、K. が TS. 3626

偈を注釈する際に、全文 H. から借用したと考えることは困難である。また K. の一切智者の智の整合性の証明は、上述の H. との一致部分に限らず、TS, TSP 第 26 章全体の主題である。他方 H. のそれは、組織立った論述としては、その部分に限られる。このことも、K. が H. に影響を与えたと考える根拠を支持しよう。以上、一切智者の智の証明方法及びその内容を巡っての K. と H. の一致をさらに B. との相違点を示し得たと思われる。それらは、Ś. に溯源し得ること³⁴⁾は言うに及ばず、さらに J. にその基本形を求めることが出来る³⁵⁾。

略号 P: The Peking edition D: The sDe dge edition

- 1) ed. by U. Wogihara pp. 531²⁵-535²⁸. 2) ed. by S. D. Shastri pp. 1122²²-1127²¹.
- 3) P. No. 5287. D. No. 3887. 4) Māl P198b³⁻⁴ D181b³⁻⁴.
- 5) *ibid.*, P201b²⁻³ D184a⁵. 6) *ibid.*, P202a⁴D184b⁵.
- 7) *ibid.*, P202a⁷ D184b⁷. 8) *Satyadvayavibhaṅga-kārikā* (D. No. 3881) 13 偈-*vṛtti* (D. No. 3882) 7a¹⁻⁶, -*pañjikā* (D. No. 3883) 27a⁷-28b⁶. 9) TSP. p. 682¹¹⁻¹⁹. 10) P. No. 5216. 224b²-225b². 11) cf. 注 (2). 最終章 XXVI の網羅的な研究は、川崎信定「法を知る人は存在するか」(平川彰博士還暦記念論集仏教における法の研究 pp. 267-289).
- 12) cf. 注 (1). 13) AAPV p. 531²⁵=TPS p. 1122²².
- 14) AAPV p. 532⁹=TSP p. 1123¹⁰⁻¹². 15) AAPV p. 533⁶⁻⁸=TSP p. 1124⁵⁻⁷.
- 16) AAPV p. 533¹²⁻¹⁴=TSP p. 1124¹⁰⁻¹². 17) AAPV p. 533¹⁴⁻²²=TSP p. 1124¹²⁻¹⁸.
- 18) AAPV p. 533²³=TSP p. 1124¹⁸⁻¹⁹. 19) AAPV p. 534²⁻⁶=TSP p. 1124²³-1125⁴.
- 20) Seitetsu Moriyama The Yogācāra-mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikāra-vādins of the Yogācāra School. Part I (仏教大学大学院研究紀要・第12号), Part II (坪井俊映博士頌寿記念・仏教文化論攷), Part III (仏教大学・人文学論集・第18号)。21) AAPV p534⁷⁻¹³=TSP p. 1125⁵⁻¹⁰. 22) AAPV p. 534¹⁴⁻¹⁷=TSP p. 1125¹⁰⁻¹³. 23) cf 注 (20). 24) AAPV p534¹⁸⁻²³=TSP p. 1125¹⁸⁻¹⁹. 25) AAPV p. 534²⁴=TSP p. 1125¹⁹. 26) *Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya* of Sthiramati (D. No. 4034) 122b⁷-123a², 123a⁶⁻⁷. 山口益『仏教における無と有との対論』p. 568. 27) 山口前掲書 p. 569, 桜部建「破我品の研究」(大谷大学研究年報・第12集) p. 74. 28) *Madhyāmakaḥṛdayavṛttitarkajvālā* (D. No. 3856) 223b⁴⁻⁶, 山口前掲書 p. 565. 川崎信定『中観心論』にみられる一切智 (Sarvajña) 思想 (印度学仏教学研究) Vol. 34-1. 29) AAPV p. 537¹⁷-536¹⁴, cf. TSP p. 1127¹⁶⁻²¹. 30) Part I, II, III. cf 注 (20). 特にそれらの AAPV の訳注で, *Madhyamakālaṃkāra-vṛtti* (D. No. 3885), -*pañjikā* (D. No. 3886) との比定を示した。31) 森山清徹「カマラシーラの *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* の和訳研究 (2)」p. 119 以下及びその脚注で, Māl, AAPV, SDK, SDV との比定を示した。Cf. Part II. p. 14 cf. 注 (20). 32) 拙稿「Kamalaśīla の唯識思想と修道論—瑜伽行中観派の唯識説の観察と超越—」『人文学論集』第 19 号 (1985) pp. 43-77. 33) ed. by U. Wogihara. p. 531¹⁹⁻²¹. 34) SDP, D. No. 3883. cf 注 (8). 35) SDV, D. No. 3882, cf 注 (8). (仏教大学講師)